

第一章 自分とは何か 7

- 私のコスモロジー—— 8
- 長命も短命も—— 11
- 老眼に想う—— 14
- 見られて死にたい—— 17
- 動物のお医者さん—— 20
- 大地震を待つ—— 23
- 死に方四つ—— 26
- 有名になりたくて—— 29

第二章 悪いものは悪い 53

- 思わせ人生—— 54
- お金を稼ぐと言う子供—— 57
- 毒薬少女に想う—— 60
- 恐怖のアンチエイジング—— 63
- エイジングはおいしいぞ—— 66
- 悪いものは悪い—— 69
- ホリエモンはなぜ悪い—— 72

- 子供は哲学する—— 32
- 私は年齢である—— 35
- 上手に死なせて—— 38
- 人生は暇つぶし—— 41
- 絶対安全人生—— 44
- 探すのをやめよ—— 47
- 見たいもの見えるもの—— 50

- 自由と規律—— 75
- 作家の安売り—— 78
- 死んでも治らない—— 81
- 私の売り言葉—— 84
- 金儲けはなぜ悪い—— 87
- サッカーはファッショである—— 90

第三章 人間の品格 93

- 選挙だってさ—— 94
- 戦争体験を語り継ぐ—— 97
- 学力いらぬ—— 100
- 景気のいい話—— 103
- 絶叫首相とその時代—— 106
- 年頭の辞—— 109

- 株取引知らない—— 112
- 楽しいお祭り—— 115
- あぶない勘違い—— 119
- 大変な格差社会—— 122
- ないものは愛せない—— 125
- 愛し方がわからない—— 128

第四章 哲学のすすめ 131

- 医者的心得—— 132
- 患者の心得—— 135
- 何用あって月世界へ—— 138
- 奇跡大好き—— 141
- 便利は不便—— 144
- 進化論ホント?—— 147
- 脳は何でも知っている—— 150

- 脳には何にもわからない—— 153
- あくまでもノーと言う—— 156
- 寒い!—— 159
- 高層の夢—— 162
- 娯楽が人生—— 165
- 前世を知りたい—— 168
- 私の神秘体験—— 171

ゆとり教育の見直しが始まったそうだ。全国一斉の学力テストが、数十年ぶりで再開されるとも聞いた。学力低下が著しいので、何とかしなければという文科省の浅智恵だろ。

気の毒なのは子供たちである。「ゆとり」と「詰め込み」の間で、子供は本当は何を学ぶべきなのか。そういう本質的な事柄に関する議論は、相変わらず為されないうままである。今さら言っても詮ないけれども、「学ぶ」とは、本当は、何を学ぶことなのか。「学力」と「思考力」とは、どう同じで、どう同じでないのか。

たとえば、最近私の文章もよくテストや問題集に採用されるのだが、そういった基本的なことが教える側に全くわかっていないというのが、端的に以下の例である。

これは拙文で、

〈思考にとつて「知る」とは、ゼロから自分で考えて知ることのみなのであって、そうして知った事柄のことを、思考は「知識」と呼ぶ。対して、外から与えられなければ知ることのできない、あるいは外から与えられたことで知ったような気になっている事柄のことを、「情報」と呼ぶ。したがって、情報と知識とは、思考にとっては対極的

な在り方をしているわけで、情報は思考を経していない。あれらは全く考えられていない〉これを例文として、その「読み方」を、こんなふうの問題集は伝授するのだ。

「対して」という接続詞に着目すること。すると、対になるものが問題文中にあると予想される。次に、「情報」と「知識」が対になっているのが見つかり、まわりくどい表現をとばせる。結論として、この文章の骨組は、知識とは自分で考えて知ることであり、情報とは外から与えられて知った気になることであるとなっているのがわかる。

「情報」と「知識」、すなわち「学力」と「思考力」の決定的な違いについて述べているまさにその文章すらも、このような仕方では情報マニュアル化されてしまうのである。述べられている事柄の意味内容すなわち「本質」には、決して立ち入ろうとしない。これが現代国語の「攻略法」なんだそうだ。こんな仕方では文章を読むことを教えられて、子供は、文章を読み自力で考えるなんてことを学びとれるはずがない。

しかし、こんな仕方では点数をとり、受験を通過することが、「学力が高い」ことなんだそうだ。それならば、学力とは、いかに自力で考えないかという技法に他ならない。自力で考えない人間が、賢い人間であるはずがない。しかし、教育とは、賢い人間に育てるといふこと以外の何であらうか。

私は時々思うのだが、もしも賢い人間になろうと思うなら、あるいは賢い人間に育てようと思うなら、人間には学力などない方がよいのではないか。いや極論すれば、字など読めない方がよいのではないか。

ちょっと考えれば気がつくことだが、我々は字が読めるがために、自力で考えるというのをほとんどしていない。たとえば天才が一生涯かけて考えたことを記した本、これを我々は一時間で読む。字を読んだというそのことだけで、それを「知ったような氣に」なってしまうのである。言葉というのは両刃の剣で、人を考えさせると同時に、考えさせなくする機能をも併せものである。

だから、この伝でなら、ひょっとしたら、字が読める人よりも字が読めない人の方が賢い。文盲の人の中にこそ、畏るべき賢人がいる可能性が高い。字が読めないからこそ自ら考えるしかない人は、自身の実存に堅固に直結した思想を所有しているはずである。言うこととすることが、完全に一致しているはずである。こういう人の前には、借り物の知識やあれこれの情報など、屁みたいに吹き飛んでしまうであろう。

言うところの「学識経験者」という人の中に、賢い人がいたためしがない。学力なんて、しょせんそんなものである。それがわかっていて、なお学力教育を推進するならば、国は国民に賢くなられては困るのだ。そうとしか思えない。

(平成十七年十月六日号)

\*「ゆとり教育」への流れは一九八〇年頃から始まり、学校週五日制完全実施と二〇〇二年の小・中学校の学習内容の三割削減で一応は結実したが、三年も経たずして学校現場や親たちから批判を浴びはじめた。

## 景気のいい話

景気がよくなり始めているというニュースを聞いた。

そんなもの、よくなるなくたっていいのに。

つい私はそう思ってしまう。商売をしているわけではないし、この仕事はもともと景気には関係ないので、景気がよくても悪くても、私はべつにどっちでもいい。のだが、どちらかと言うと、やっぱり景気がよくなるのはよくないことだと私は感じる。

バブルという時代が存在したのを、私は知らなかった。世の中というのは、いつもそんなふうに浮かれているものだと思っていたので、とくにそんな時代があったとは知らなかったのである。その頃も今も、私は変わらずに考えて書いている。

ところが、そのバブルなる時代が崩壊して、世の景気が一気に悪くなったということだ。倒産、破産、リストラが相次ぎ、人々が生きる目標を見失ったと言われていた。

そして、同時に言われ始めたのが、人がものを考え始めるのではないか、内省するようになり、哲学が復権するのではないかということだった。外面の時代から内面の時代へ、浮かれていた夢から醒めて、人生の本質を追求し始めるのではないかと。

私はほとんど信用していなかった。景気がよかろうが悪かろうが、考える人は考える

し、考えない人は考えない。哲学と時代とは全く関係がないということを知っているからである。こんな時代をどう生きるかみたいな人生訓を、哲学と称しているようなのは別である。本来的な哲学的思考というのは、いかなる救いも与えるものではない。動機は、この存在がどうなっているのかを知りたいという、たんにそれだけだからである。生きるために哲学しようなんてのは、そもそも話が逆なのである。

だから、バブルが崩壊したからといって、とくに私の哲学本が売れるようになったというわけでもなかった。何の救いにもならないのがわかるのであろう。ほらね、やっぱり関係なかったじゃないの。

そう思っていたら、景気がよくなるというそのニュースである。やっぱり人は哲学をしないまま、そのまままた浮かれ始めるわけである。現われる人物を見るだけでも、その後社会は何も学ばなかったということがよくわかる。脚光を浴びるのは、IT長者であり、何じやらセレブである。「勝ち負け」の選別はいよいよ鮮やかで、景気よくなるそのよくなり方は、前よりも悪いんじゃないのか。

経済のことはわからない。しかし、わかるのは、六本木ヒルズなんて行ったこともないけれど、ああいうものがいかに醜悪で危ういものかということだ。あんなところ、私が子供の頃は鯛焼を食べながら遊んだところである。鯛焼と豆菓子以外は何にもなかったところである。そんなところに、いきなり建ったあんなものが、選別の象徴として羨望的になるということ自体が、野暮である。みっともない。節操を知らない。

景気がよくなると、だいたい人は、節操が悪くなる。衣食足りて礼節を知るというのが嘘なのは、衣食足りて哲学をするというのが嘘なのと同じである。哲学なんてのは、生活に困らない人がするものだというのが、哲学をしない人の常套句である。しかし、見ればいい、あんなにも生活に困らない人々、衣食のあり余る人々が、哲学する気配に一向にならないのはどういうわけか。

やっぱり、哲学と生活とは全然関係ないのである。生活できようができまいが、哲学する人は哲学するし、しない人は死ぬまでしない。本当のことを知りたいかどうかだけである。そう言えば、バブルの頃に、哲学なんてダサイじゃんと言われたことがあった。哲学の価値も、株価に合わせて、乱高下するのである。あはは、ばかばかしい。

ところで、「負け組」の皆さん、どうです、ここらで本気で哲学始めてみませんか。時代も人生も、しょせんこの世の出来事だと見えてくるのは、なかなかイイものですよ。「失われた十年」なんて、笑わせちゃいけません。存在は不滅です。

(平成十七年十月十三日号)

し  
知ることよりかんが  
考えること

著者 池田晶子（いけだあきこ）

発行 2006年10月20日  
17刷 2021年9月10日

発行者 佐藤隆信  
発行所 株式会社新潮社  
〒162-8711



東京都新宿区矢来町71  
編集部 03-3266-5611  
読者係 03-3266-5111

<http://www.shinchosha.co.jp>

印刷所 大日本印刷株式会社  
製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送りください。  
送料小社負担にてお取替えいたします。  
価格はカバーに表示してあります。

©NPO法人わたくし、つまりNobody 2006, Printed in Japan  
ISBN978-4-10-400108-8 C0095